

O3-037

医療的ケア児が在籍する小中学校への
医師による巡回指導の有効性
-札幌市における3年間の実践より-土島 智幸^{1,2}、木井 琴恵^{1,2}、山崎 薫^{1,2}¹医療法人稲生会²北海道医療的ケア児等支援センター

【背景と目的】

2021年に施行された医療的ケア児支援法において、看護師等の配置による医療的ケア児への適切な支援が学校設置者の責務と定められた。札幌市では2018年度より医療的ケア児が在籍する小中学校への看護師配置を開始、2021年度には医療的ケアを実施する時間帯には全て看護師を配置するに至った。その結果、地域の小中学校への医療的ケア児の入学は急増しているが、多くの小中学校では初めて医療的ケア児が入学することになるため、体制整備や日々の教育活動においては課題も多い。そこで、札幌市では2020年10月より医療的ケアサポート医師による巡回指導を開始した。小中学校が抱える課題と望ましい支援体制について考察するため、巡回指導の内容を分析したので報告する。

【方法】

2020年10月から2023年9月までに実施した巡回指導の記録について、開催時期および時間、参加者の属性、相談内容、議論の内容、医師からの助言内容とその結果について分析した。

【結果】

22校に対して、のべ40回の巡回指導を行った。開催時期は、定期巡回指導は5～翌2月と通年で開催されていたものの9月が最多で、就学前指導は11～翌2月に開催されており半数は1月の開催であった。対象生徒の障害種別は、狭義の医療的ケア児(二分脊椎や1型糖尿病など障害が無いもしくは軽度の児)が71%、肢体不自由が17%、知的障害が8%、聴覚障害が4%、在籍学級は、通常学級が50%、知的障害が38%、病弱・身体虚弱が8%、難聴が4%であった。会議への参加者は、学校側では教頭が全例参加、担任その他の教諭が63%、特別支援教育コーディネーターは28%、養護教諭は18%であり、保護者の出席は10%であった。定期巡回の内容として、狭義の医療的ケア児については、看護師による生徒へのかかわりに関する相談が多く、教員および看護師による自立支援に関する助言が多かった。肢体不自由児については、水泳学習・避難訓練・校外学習の準備についての相談が多く、指導における手立てや特別支援学校のセンター的機能の活用など、教員の指導に対する助言が多かった。

【考察と結語】

医療的ケア児が在籍する小中学校への医師による巡回指導は、狭義の医療的ケア児の自立支援や、肢体不自由児の指導に関する専門的な支援など、教員や学校看護師に新たな視点を提供するという意味で有効であったと考える。

O3-038

小児の学校トイレにおける手指衛生状況の調査
-学校トイレ後の手洗いに影響する心理的因子
の探索およびA3法による手指衛生評価-大澤 まみ¹、中島 伸子²、亀岡 雅紀³、大島みなみ¹、
大島 明佳¹、小林 真依¹¹新潟大学医学部 保健学科²新潟大学大学院 教育実践学研究所³新潟医療福祉大学健康科学部 健康スポーツ学科

【目的】

近年、小児の感染症対策として手洗いの有用性が再認識されている。本研究では小中学生の学校トイレの手洗い状況や心理面を調査した。さらにトイレ手洗いの衛生効果を評価して現在の学校トイレ手洗いに関する課題を検討した。

【方法】

A小学校・B中学校(回収率27%、n=222)を対象に学校トイレでの手洗い状況や時間、家庭トイレでの手洗い時間の比較を無記名自記式質問調査した(カイ二乗; $p < 0.05$)。また手洗いの衛生効果を評価する目的で、中学生4名のトイレ模擬行動前と後、手洗い後の両手指の衛生状態をA3法(微生物を含む有機物のアデノシン一、二、三リン酸を測定; RLU)で測定した(Wilcoxon符号付順位; $p < 0.05$)。

【結果】

学校トイレの手洗いは小中学生の95%以上が必ず洗う・洗うことが多いと回答した。手洗い15秒未満の小中学生は各々40、34%であった($p=0.43$)。学校トイレの手洗い時間が家庭より長い中学生(9%)は小学生(23%)より有意に少なかった($p < 0.05$)。理由として、小中学生ともに、理由はない(44%、47%)が最も多く、次に小学生は、休み時間が短い(30%)、中学生は、周りにいる人が気になる(26%)が多かった。手洗いの衛生評価ではトイレ模擬行動前後のA3値に有意差はなかった{中央値(四分位範囲); 36435(27515-108275) RLU vs. 26223(18527-84819) RLU, $p=0.07$ }。トイレ模擬行動後の手洗い時間は全員が15秒以下で、手洗い後A3値は減少したが有意差はなかった{26223(18527-84819) RLU vs. 4501(3581-45175) RLU, $p=0.07$ }。

【考察】

小中学生共に学校トイレでの手洗い施行率は高いものの、ウイルス残存率が約1%に減少する15秒(森他, 感染症学雑誌, 2006)未満が4割を占めた。特に中学生は小学生よりも学校と家庭トイレ後の手洗い時間に差があり発育に伴う羞恥心の影響が示唆された。また中学生のトイレ模擬行動後の手洗い時間は全員が短く、手洗い後A3値は2000 RLU(推奨値)より高値であったため、短い手洗い時間では有機物除去が難しいと考えられた。本研究により児童の手指衛生基準を満たすためには学校トイレの羞恥心や手指衛生に関する指導が有用と考えられた。